大学院生の研究

博士後期課程 3 年次　酒嶋　恭平

博士後期課程に所属している酒嶋恭平です。古代ギリシア史を専門にしています。現在はスコットランドのエディンバラ大学で研究に励んでいます。主として古代ギリシアの政治史・文化史に関心がありますが、具体的には次の点を研究しています。一つ目は、ヘレニズム・ローマ時代におけるペルシア戦争の記憶の在り方について。ペルシア戦争は、身も蓋もない言い方をすれば、アカイメネス朝という大帝国の片隅で起きた局所的な戦闘に過ぎません。しかし、当事者であった古代ギリシア人にとっては、そのアイデンティティを確立する重要な契機として、また世界史的な観点で見ると、西洋文明の形成に決定的な意義をもたらした出来事として捉えられています。私の研究では、ペルシア戦争がギリシア人にとっての「自由」の勝利から西洋文明の起源として普遍的な価値を帯びていく過程の中で、ヘレニズム・ローマ時代に生きたギリシア人、マケドニア人やローマ人が果たした歴史的役割を探っていきたいと考えています。二つ目は、ヘレニズム諸王とポリスの関係について。ヘレニズム時代を特徴づけるのは、ヘレニズム王とポリスの互酬的関係です。スーパーパワーが林立したヘレニズム時代にあって、王たちは、支配圏を維持するために、影響下にあるポリスに対して資金・穀物提供などの恩恵施与を行う必要がありました。ポリス側は、それを利用して利益を得ると同時に、支配者に対する謝意を君主礼拝などの形で表現していました。私は、とりわけ、そうした関係が形成された後継者戦争（323-281 BC）の時期に、どのような過程を経て両者の間に外交文化が生まれ、そこにいかなるアクターが介在したかに関心があります。三つ目は、アッティカ碑文慣習について。アテナイが位置するアッティカ地方では古代を通して多数の石碑が建立されました。そうした石碑をモニュメントとして捉え、その特徴や社会的機能を明らかにすることで、文学的史料だけではわからない古代アテナイ社会の様々な側面に光を当てたいと考えています。

博士後期課程 3 年次　藤田　風花

昨年 10 月より、バーミンガム大学ビザンツ・オスマン・近現代ギリシア研究所にて在外研究をおこなっています。中近世東地中海世界における複数の文化圏の交錯のありようを体現する存在としてのギリシア語話者正教徒に注目し、ラテン人支配期（とくにヴェネツィア支配期）のキプロス島を研究対象としています。ヴェネツィア支配期において、キプロスの正教会とカトリック教会の関係の制度的基盤として機能していたのは、リュジニャン朝期の 1260 年に教皇アレクサンデル 4 世によって公布された『キプロス勅書』（以下『勅書』）でした。現在は、『勅書』にいたるまでの両教会関係の制度的側面について、考察をまとめているところです。

リュジニャン朝期キプロスでは、第三回十字軍ののち到来したラテン人支配者が、支配体制を確立していく過程で、新たに設立されたカトリック教会と現地の正教会との関係について問題が生じました。しばしば両教会関係についての「マグナ・カルタ」にもたとえられる『勅書』の評価は、従来のキプロス史研究におけるラテン人支配期の意味づけとも密接に結びついてきました。ギリシア民族中心史観では、ラテン人によるギリシア人の

抑圧の象徴とされてきた『勅書』は、1980 年代以降の修正主義史観において、カトリック教会の妥協の産物あるいは両教会の交渉の結果として、見直されつつあります。このような研究潮流を踏まえ、『勅書』の意義について再検討をおこなっています。

現在はおもに制度面を中心とした研究を進めていますが、今後は制度的枠組みをこえた両宗派間の相互作用についても検討していきたいと考えています。在外研究後半は、フィレンツェ公会議の東西教会合同が、キプロスでどのように受容されたのかというテーマについて取り組む予定です。

博士後期課程 2 年次　小山田　真帆

古代ギリシア世界、特に民主政期のアテナイを対象に、ジェンダー・セクシュアリティをテーマとする研究に取り組んでいます。アテナイの市民は他の住人（在留外国人や奴隷など）には認められない種々の権利を享受する特権集団であり、その成員資格は「両親ともにアテナイ市民である者」にのみ限定するという閉鎖的な性質を持っていたにもかかわらず、現在で言うところの戸籍や出生届、婚姻届のような、出自や身分を証明する公的制度を欠いていました。民主政機構が精緻化したと言われる前 4 世紀においてさえこうした状況は変わらず、制度の欠陥や矛盾と理解されてきました。

しかしながら古代のアテナイ社会において、人々が互いを市民として認める方法は、制度や機構にのみ依存するものではなかったことが近年指摘されています。2500 年前の社会でありながら政治制度や法が整備された民主政期のアテナイは、つい近現代的な視点で観察されてしまいがちですが、アテナイにおいて市民身分とは純粋に法や制度によってのみ規定されたものではなく、制度の外で認識・承認されるものでもあったのです。市民たちは「市民に相応しい行動」を見せ合うことで互いの市民身分を社会的に承認していました。アテナイ市民身分とはパフォーマティヴな側面を持っていたとも言えるでしょう。

私はこうしたアテナイ市民身分の理解から、市民の性的行動が社会における市民身分承認に与える影響について研究しています。現在は一般に「姦通」と訳される「モイケイア」という行為について調査しています。モイケイアは具体的にどのような行為を指す語として使われていたのか、モイケイアを犯した男女は周囲の市民からどのように認識される可能性があったのか、法で定められた厳格な制裁と日常における認識にはどれほどのギャップがあったのか、といった問いについて、法廷弁論や喜劇を史料として考察していきたいと考えています。

博士後期課程 2 年次　中辻　柚珠

近現代チェコ・ナショナリズム史を専門としています。研究対象は「マーネス造形芸術家協会（Spolek výtvarných umělců Mánes）」というモダニズム芸術家団体です。モダニズムという汎ヨーロッパ的な運動に加わる芸術家たちの言説を辿りながら、ナショナリズムの時代における彼らの主体性を調査しています。こうした問題意識に即し、タラ・ザーラを中心とする「ナショナル・インディファレンス（ナショナルなものへの無関心）」研究の分析方法を参照しています。また、単に参照するのみでなく、研究手法の刷新にも取り組んでいます。

これまでは世紀転換期の活動に焦点を当ててきましたが、最近は第一次世界大戦とチェコスロヴァキア共和国建国後の時代に焦点を移し、大戦と建国の経験がいかに芸術家たちの思想・活動に影

響を与えたか、またその経験を通じても変わらなかったものとは何かについて研究しています。2019 年 8 月から 9 月にかけて史料調査に行っており、その際入手した団体の議事録を中心に史料の読み進めを行っています。手書き史料に取り組むのは初めてで、いくらか苦戦もしていますが、これまで主たる一次史料としてきた公的な出版物（具体的には『自由な潮流』（*Volné směry*）という彼らの機関誌）との言説の違いがとても面白く、楽しんで取り組んでいます。

2020 年 8 月には初めて国際学会で報告する予定でしたが、新型コロナウイルスに伴い、2021 年 8 月に延期となりました。2020 年 9 月からはカレル大学での在外研究を予定しています。こちらも決行できるか分かりませんが、無事行けた際には、充実した滞在としたいと思います。先の見えない中、できることを確実に進めることが大事だなと思う毎日です。前年度は目標としていた 1 本目の論文の投稿が果たせなかったので、今年度は書くことに一層の重きを置いて、研究活動に励みたいと思います。

博士後期課程 2 年次　吉田　瞳

第 3 号の同コーナーに記したとおり、2019 年 7 月末から 1 年間、南ドイツのエアランゲン＝ニュルンベルク大学（FAU）に、客員研究員として滞在しています。まずは第 3 号に載せた留学目標の、2020 年 3 月現在における進行状態につきまして。私が留学の目標として挙げたのは ①手稿史料の解読技術の習得 ②ドイツの大学院に正規入学するための語学力の獲得、および受入先と奨学金の確保、の 2 点です。

①自分の研究に関わる史料については、翻刻されデータベースにまとめられたものを参照しているので、いまだ「必要に迫られて読む」という状況には至っていません。とはいえ折角なので、FAU 中世史講座の古文書学講義を受講しました。どれくらい理解できたかはさておき、現地では（中世史所属の）学部生ですら、デジタル・ヒューマニティーズを学ぶと知り驚きました。外国人研究者にどれくらいの影響があるかは解りませんが、いよいよ「歴史学徒も（簡単な）プログラミングが出来て当たり前」の時代が来るようです。

②留学期間が半分強過ぎた現時点で Goethe-Zertifikat の B2 を取得済です。正規入学に必要な DSH-2 ないし TestDaF4 も、残りの期間中に挑戦したいと思っています。一方、受入先については目処がついたものの、奨学金はこの 9 月が正念場という状況です。もちろん自分の実力不足がいけないのですが、予想外の出来事が連続している影響もあるので、人生運も大事だと思う次第です。

運と言えば、私は今、医療崩壊の可能性が極めて低い民主主義国家で、パンデミックを経験する幸運に与っています。まだ心に余裕がある状態で「ある日突然いっさいの史料調査が出来なくなる恐怖」「繰り返される語学試験の延期」「なぜか移民系から受けるアジア人差別」を体験しています。1 年間の奨学金申請予定をすべて白紙に戻した「受入教授の変更」に続き、コロナによって史料調査と語学試験の予定が全て狂いましたが、まぁ出来ることをしています。

修士課程 2 年次　石田　和生

私は現在、中世後期のフィレンツェ、特に 14 世紀末に寡頭政が成立してから、コジモ・デ・メディチが都市の実権を握りメディチ体制が成立する時代を取り上げ、この時代における人的紐帯を明らかにする研究を行っています。研究対象としては都市貴族アルビッツィ家を取り上げています。アルビッツィ家は 14 世紀末に発生した中下層労働

者によるチョンピの乱とその後の反動によって成立した寡頭政において大きな権勢を誇り、メディチ体制成立の時代にあってはメディチ家と激しく対立し、最終的には権力争いに敗北した家門です。

具体的な研究内容としては、アルビッツィ家が備えていた派閥関係、パトロネイジ関係に注目して、この変化を考察しています。寡頭政期フィレンツェにおいては、有力家門が限られていく中で、従来的な家と家の繋がりに加えて友人関係を元にした個人的な人的紐帯が増加し、こうした個人的なパトロネイジ関係も含めて有力家門は派閥を形成していました。1434 年の政変で成立したメディチ体制も、メディチ家に従うメディチ派が都市の要職を固めることによって成立したと考えられています。そこで私はアルビッツィ家の派閥を注視し、メディチ家との権力闘争の結果、当時の派閥の長であったリナルド・デッリ・アルビッツィが都市から追放された 1434 年の政変の前後に注目し、アルビッツィ派がどのように変化したかを観察したいと考えています。また、リナルドの弟でありながら、メディチ派として政変後も都市内に権力を保持したルーカ・デッリ・アルビッツィにも注目し、メディチ体制が成立した中でかつてのアルビッツィ派がどのように変化したかについても考察を行い、これによってメディチ体制そのものにまで考察を進めていきたいと考えています。

修士課程 2 年次　石濱　萌

現在私が興味を寄せ、研究の対象としているのは、17 世紀イギリスにおける異形の存在たちです。しかし異形と一口に言っても、所謂モンスターのようなものや、奇形など、その真偽も合わせ多様です。そのなかでも私は特に、驚異的、怪物的と呼ばれ、庶民から知識人と、幅広い層から注目を受けた奇形をもつ人々に注目しています。奇形を持った人々は時に怪物と呼ばれ、注目を集め、また時に彼らは大通りや十字路、縁日やパブのような場で、自分自身の身体を見世物として公開していました。彼らはその特徴的な身体故に、多くの驚異的な出来事などについて扱う書物や年代記に取り上げられ、彼らが行った見世物の様子は、当時の人々の日記や宣伝ビラ、パンフレットなどに見られます。

そのような怪物と呼ばれた人々についての研究は、1980 年代以降、怪物研究という形で行われてきました。しかしそういった研究内では、近世における奇形を持った人々の怪物視や、その周辺の思想や事象を扱うことが多く、当事者たちに光が当たることは多くありません。彼ら自身による身体を用いた見世物を取り上げた研究もありますが、それでもあくまで現象として扱ったものであり、身体を行使している実態については軽視されています。そのため私は、当事者たちの活動が見られる場として、そういった見世物の場を想定し、そこでの身体の活用などから、当事者たちの自己認識等について、限定的ではありますが考えていきたいと思っています。またその上では身体史、障害史研究の動向に注目することも不可欠です。自分が追ってきた怪物研究と照らし合わせ、また同時に近世イギリスの思想や社会とも向き合いながら、研究を進めていきたいと考えています。

修士課程 2 年次　石原　香

私は現在、フランス革命総裁政府期（1795-1799 年）における国民祭典を、南仏の都市トゥールーズの事例から研究しています。

総裁政府と聞いてもあまり馴染みがないように思いますが、この時期にはフランスの公教育にかかわるさまざまな政策が実施されました。国民祭典はその中でとりわけ重視され、一年間の決まっ

た日に、毎年フランス全土で数十種類も催されたのです。総裁政府が国民祭典に求めたのは、共和国の理念をフランス国民に広めることでした。革命によってそれまでの王政は廃止され、フランスの体制は共和政となりました。そして、共和国にふさわしい人間へと国民が生まれ変わるために、総裁政府は国民祭典内にあらわれるさまざまな見世物を通じて、共和国の理念を普及させようとしたのです。

私は、国民祭典に反映された共和国理念がいかなるものだったかという問いを考えるうえで、その理念を受け取る側、つまり市民の反応に注目しています。祭典とは「非日常」の場であり、日常とは違う雰囲気によって市民の感性はより豊かになります。そこで私は、彼らが示すあらゆる感情・反応が、国民祭典およびその共和国理念になにかしらの影響を与えたのではないかと考えました。理念がどの程度市民に広まれば祭典は成功したのかという、祭典の組織者＝理念を与える側と市民＝理念を受け取る側の二項対立ではなく、両者の相互関係を検討していきたいです。

国民祭典にかんするトゥールーズの史料からは、市民のさまざまな反応が読み取れます。トゥールーズは長らく文芸の街であり、地元の愛好家が多数存在しました。彼らが祭典を組織する、また参加するからこそ、ほかにはない新しい視座が得られると考えています。祭典の準備に積極的に参加したり、市長の演説に感動して拍手を送ったり、その一方では朝早く起こされることにうんざりしたりというように、史料からうかがえるこのような市民の反応に注意しながら、考察を進めていきたいです。

<u>修士課程 2 年次　伊藤　直之</u>

専攻はフランス近世史で、特に 16～17 世紀にかけて国王の権力がフランス王国内で確立されていった過程について研究しています。アンシャン・レジーム期のフランス王国の政体を指して、しばしば「絶対王政」という語が用いられます。ここでいう「絶対」、これはいったいどのような状態を指しているのでしょうか。この政体のなかで、国王はいったいどのように振る舞っていたのでしょうか。そもそも「絶対王政」はどうやって成立したのでしょうか。

こうした問題に取り組む上で、必ず考えなければならない機関があります。国王顧問会議です。この国王顧問会議は国王のそば近くでその統治を支えており、そこから発布される裁定を通して国王の政治は行われていました。たとえば、国王顧問会議から発せられた裁定が地方長官（アンタンダン）に伝えられ、地方長官がその内容を各地方で実施する、という具合です。もちろん、発せられた裁定がつねにその通りに間違いなく実行されていたわけではなく、実際には地方に遍在していたいろいろの団体との交渉があったうえで運用されていたのですが、国王顧問会議が国王を中心とする政治運営の原動力であったことは事実です。

ですから、国王顧問会議が国の政治を運営するうえで主導的な役割を果たすようになった過程をみることができれば、上の問題に一つの答えを導くことができそうです。国王顧問会議を頂点とした政治の行われ方、国王顧問会議における国王自身の位置、国王顧問会議がほかの機関に対して優越を確保していった過程、これらを明らかにすることで「絶対王政」とはどのような政治体制だったか、を考察するのがいまの私の目標です。

現在は、ルイ 14 世親政前に発せられた裁定を入手し、そこから当時の国王顧問会議がどのような案件に取り組んでいたか（あるいは、どのような案件に取り組んでいなかったか）を調べています。その裁定が実地の段階でどう適用されていたか、

を追うことができれば楽しいですが、それはまだ先の話です。

修士課程 2 年次　大野　普希

ローマ帝政期のギリシアでは、後 2 世紀を中心に「第 2 次ソフィスト運動」と呼ばれる文化潮流が隆盛しました。ギリシア古典期の歴史を理想化し、その遺産である古典文化を模倣する傾向が強まり、これが文学から建築、政治弁論に至るまで、文化のあらゆる領域を支配するようになったのです。こうした傾向はローマ支配に対する文化的な抵抗を意味するのか、あるいはむしろ、ギリシア文化の愛好者であるローマ人に対する迎合と言うべきか。その解釈を巡っては長きにわたって議論が続いてきました。

しかしながら、歴史への注目はギリシアとローマとの関係においてだけでなく、都市単位でも見られる現象です。例えば当時、ギリシア諸都市の間では建国神話への関心が高まりを見せていました。系譜を遡って都市の「ギリシア性」を証明することが、有力者からの援助や帝国内での特権の獲得など、種々の現実的利益をもたらしたことがその一因ですが、他方でこれは「プライドの問題」でもありました。諸都市は神話や歴史における自らの重要性を強調することで、文化的な名声においても他都市に対して優位に立とうとしたのです。

したがって、過去の記憶の全てが「ローマ」支配下に生きる「ギリシア人」としての意識に関わるものだったとは言えず、むしろ同じ記憶が、個々の都市や地域に根差したアイデンティティの形成、あるいはギリシア内での諸都市の差別化を促進する方向に作用する場合もあったと考えるべきでしょう。

後 2 世紀後半、「第 2 次ソフィスト運動」の最盛期に執筆されたパウサニアスの『ギリシア案内記』は、ギリシア本土の諸都市の歴史と景観を一つ一つ丹念に描き出すことで、こうしたアイデンティティの多層性とその背後にある様々な歴史観相互の矛盾や競合を克明に伝える作品です。その分析を通して、この時期の文化の特徴である、過去への固執の意味を問い直すことが私の課題です。

修士課程 2 年次　岡本　幹生

私は古代ローマ史を専攻しており、現在は帝政成立期における「ローマ皇帝」像について研究をしています。「ローマ皇帝」は、法的に定められた制度・役職ではなかったにもかかわらず、その「制度」は維持され、代々受け継がれていきました。法によって規定された存在ではなかった、「ローマ皇帝」は人々の認識と受容によって「ローマ皇帝」たり得たと近年の研究で指摘されています。そこで、私は帝政の成立した当時（つまりアウグストゥス帝期）の人々が、いかなる「ローマ皇帝」像をもっていたのかに注目しています。近年、アウグストゥスが権力を確立していく中で、イメージ戦略が重要なものであったことも主張されており、私の研究はアウグストゥスのイメージ戦略がいかに反映されているのかを示すものともいえるでしょう。

そこで、私は「ローマ皇帝」像について分析していく上で、アウグストゥスとユリウス・カエサルとの距離感に焦点を当てています。オクタウィアヌスがカエサルの後継者として内乱期に頭角を現したことはよく知られています。その内乱が終わった後、オクタウィアヌスがアウグストゥスの尊称を元老院から賜り、アウグストゥスが次第に権力を確立していくと、次第にアウグストゥスがカエサル（のイメージ）と距離をとるようになったか否かの議論があります。この議論は、従来、神格化に関する研究の中で行われてきましたが、

「ローマ皇帝」像を考える上でも、重要な視点だと思われます。なぜなら、アウグストゥスが権力確立後もカエサルの後継者を標榜していたのなら、カエサルのイメージは「ローマ皇帝」像とも密接に結びつくものであり、カエサルと距離を置いたのならアウグストゥスの中にカエサルの後継者のイメージを払拭した「ローマ皇帝」像が見出せるはずだからです。

修士課程 2 年次　藏戸　亮太

私はプトレマイオス朝エジプトを研究対象としています。アレクサンドロス以降の時代については、「ヘレニズム」概念を提唱したドロイゼン以来多くの議論がなされてきました。ヘレニズム時代はギリシア系の人々がオリエント地域を支配し、同地域でギリシア系住民の活動が拡大した時代でした。そのような状況下で、東西の民族の混交が生じたとされています。私はそれらのギリシア系住民と、多数を占める現地住民との間の関わりに関心を持っています。

プトレマイオス朝エジプトにおいては、ギリシア系住民の「エジプト化」が起こったとされる一方で、1980 年代には双方の人々の分離が強調する説が唱えられ、近年では再び両者の結びつきの重要性や同化が指摘されています。特に地方においては、前２世紀以降現地民の女性と結婚するギリシア系住民が現れ、ギリシア人・混血及びギリシア的教養を持つ住民・エジプト人の３つの階層が形成されたとされています。また、ギリシア系住民に影響を与える現地民エリートの存在も指摘されています。

現在私は、プトレマイオス朝前期に地方で活動したギリシア人に注目しています。プトレマイオス朝においてギリシア文化は様々な面で優位な地位を獲得し、ギリシア的教養が社会的上昇の手段ともなりました。しかしその一方で、ギリシア人がエジプト的な要素を取り入れるということも同時に起こっていました。時が経つにつれ文化的出自が曖昧になり、「ギリシア人である」ことにおけるギリシア文化の重要性が増していったにもかかわらず、です。プトレマイオス朝におけるギリシア人のアイデンティティは、ヘレニズム時代、そして異なる文化の間で生きる人々について考える上で非常に興味深いものであると私は考えています。

修士課程 2 年次　林　祐一郎

私はプロイセン及びドイツの亡命ユグノーとその子孫たちの歴史について研究していて、2019 年 9 月から一年間はベルリン自由大学で交換留学中です。自由大にはフリードリヒ・マイネッケ歴史学研究所があり、そこで移民史家アレクサンダー・シュンカ教授のお世話になっています。長期留学では大変なことも多いですが、ベルリンでの調査や研鑽を通じて、自分の研究の対象や内容を見直す良い機会が得られました。

プロイセン王国やドイツ帝国の少数派に関する研究は日本でも熱心に取り組まれるようになりましたが、17 世紀後半にフランスからやって来たユグノーたちに関する研究はごく僅かです。また、ドイツには古くからユグノー史研究の蓄積があるものの、17〜18 世紀を対象としたものが殆どで、国民国家や人種主義の時代に彼らが多数派や他の少数派との関係の中で自らを如何に位置付け、他者から如何に眼差されてきたのかを検討し、彼らの自他認識の複雑な変容過程を近世から近現代まで俯瞰する歴史像は、未だ十分には提示されていません。

「弱者」と捉えられがちな少数派ですが、自らの「先進的」な技術や文化でプロイセンやドイツ

の「近代化」に寄与したと自負し、為政者たちからも称揚されたユグノー系ドイツ人たちは、まさに「強者」の少数派となりました。ドイツ帝国宰相ビスマルクは彼らを「最も良きドイツ人」と称え、ナチスの人種理論家ローゼンベルクは彼らを「北方人種」の一部として優位に置きました。その背景には、ポーランド人やユダヤ人といった、ユグノーより非同化的で役に立たないとされた少数派の存在が想定されています。「プロイセンの養子」と呼ばれたユグノーの末裔たちは、18 世紀から 20 世紀にかけてナショナリズムと学問的歴史が隆盛する中、如何なる自他認識に基づいて如何なる歴史観を披露し、それは各方面から如何に受容されたのでしょうか。

修士課程 2 年次　米倉　美咲

Hast du Corona? そう背に声をかけられた時、驚きや悲しみと同時に「やはり」との思いが捨てられませんでした。大半の日本人留学生が既に同様のことを経験しており、ヨーロッパの地で「アジア人」の容姿をしている意味を、我々は知りつつあったのです。我々が半年前からドイツにいることなど、そこでは一切関係ありません。我々は「招かれざる客」だったのです。ほどなくして、多くの日本人留学生は帰国を余儀なくされましたが、次に我々を待っていたのは、帰国者に対する厳しい世間の目でした。自宅待機を守っていても、我々は再び「招かれざる人々」となったのです。

私は昨年九月から一年間、ドイツのハイデルベルク大学へ留学しています（2020 年 3 月末現在、日本に一時帰国中です）。上述の事件以外にも、無論、普段通りに接してくれた友人たちや、帰国に際して尽力くださった先生方、家族の存在も強調されねばなりません。ですが、危機を目前にして顕在化する差別意識、レッテル貼り、疑心暗鬼を自分の肌で感じた経験は、研究姿勢の再考を迫りました。と言うのも私は、16 世紀前半フランスにおいて、「ルター派」異端という一種のレッテル貼りが創出される過程を研究しているからです。その思想や著作が実際のところどうであれ、「ルター派」異端と判じられた彼らは、弾劾され迫害され処刑されました。私はこれを二項対立創出に伴う「悲劇」だと思い、実際、専門外の人に対しては、同構造の「悲劇」が未だ繰り返されていることを訴え、研究の意義を語ってきたのです。そうだとするならば、冒頭の私の経験は、研究意義を証明する絶好の機会だったのでしょう。しかし私はそれを素直に喜ぶことが出来ずにいます。それはあの衝撃から抜け出せないからではなく、むしろ、散々意義を語っておきながら、自分の身に降りかかるその時まで、その深刻さに思い至らなかったことに愕然としたからかもしれません。空虚な言葉で語らないことが、私の研究の遥かな課題と言えそうです。

修士課程 1 年次　中山　真由香

私が研究対象にしているのは、オーストリア近現代史です。とりわけ 19 世紀後半のハプスブルク帝国における多民族性について取り組んでいます。

卒業論文では、19 世紀末ウィーンにおけるユダヤ人の活躍と反ユダヤ主義との関わりについて扱いました。もともと、世紀末ウィーンの芸術や文化に対する関心がありましたが、それらの分野を支えたユダヤ人たちの存在を知り、研究の題材とするに至りました。19 世紀以前は大々的な社会進出が難しい状況にあったユダヤ人たちでしたが、ハプスブルク帝国領内においてはアウスグライヒを筆頭にユダヤ人たちにも社会的な解放が進められていきます。この中で特に社会的な成功を収めたのは、同化ユダヤ人と呼ばれる、ドイツ＝オー

ストリア文化に同化したユダヤ人でした。同化ユダヤ人たちが、本当にドイツ＝オーストリア文化に同化しているならば、かれらの成功は認められても不思議ではない中で、反ユダヤ主義的な言説は逆に増加していきます。ユダヤ人との活躍と反ユダヤ主義の激化とのアンバランスを検討する中で、ユダヤ人と非ユダヤ人の社会的かかわりの希薄さに注目しました。卒業論文ではウィーンにおけるユダヤ人居住地の偏りが、非ユダヤ人たちとの隔離につながり、相互不理解の原因となったと結論付けました。

現在は、19 世紀末のハプスブルク帝国が多民族国家的性格を持ちながらも、いかにして帝国を持続可能にせしめたかを解明したく思っています。そのうえで、帝都ウィーンのみならず、広く帝国領内で活動していた知識階層の動向に注目したいと思っています。この問題意識に対する先行研究の整理や資料選択など課題は多いですが、多民族を抱えながらも体制維持を可能にした要因を解明したいという関心のもと、研究を進めていきたいと思います。

修士課程 1 年次　新田　さな子

「レディ・ジェーン・グレイの処刑」をご覧になったことはあるでしょうか。2017年に東京都と兵庫県で開催された「怖い絵」展の顔となった絵画です。小学生の頃にシャーロック・ホームズを読んでからイギリスに惹かれて自分なりに知識を深めていましたが、高校生の時にジェーン・グレイに興味を持ったのが近世イギリス史、中期テューダー朝研究への入り口でした。中期テューダー朝はヘンリ8世とエリザベス1世という「偉大な」君主に挟まれ、エドワード6世はサマセット公、ついでノーサンバランド公に政治を牛耳られた弱く幼い君主、メアリ1世治世はカトリック政策を復活させた「逸脱」の時代とされてきました。近年ではノーサンバランドの再評価や、宗教改革への見直しも進んできていますが、まだ十分とはいえない状況です。

卒業論文ではエドワードの死後とメアリの即位の間に起こり、ジェーン・グレイの投獄の原因である1553年王位継承危機について扱いました。王位継承者の決定方法、議会権威の増大、エドワード6世政権と彼自身の再評価、地方都市政府の自律性・能動性などの点から危機を再評価し、テューダー朝史、イングランド史への位置付けを試みました。

現在は、卒業論文を執筆する中で関心を持ったイーストアングリアの地方都市政府間、そして地方政府・中央政府間の協力、反発、無関心などを含めた関係性について研究を進めたいと思っています。イーストアングリアは中世から対岸のヨーロッパ大陸との貿易で栄えた都市が複数あり、1553年王位継承危機、その4年前のケットの反乱でも舞台になりました。また、イングランドで最も伝統と権威のあるノーフォーク公爵の領地があり、メアリ1世の宮廷が置かれたこともあった、王権との関係が深い地域でもあります。今年度は後期から1年間休学してイギリスのヨーク大学大学院MAコースに在籍するので、そちらで一次史料を入手し研究を進めていきます。